

## コロナ禍に茶道と出会って

石川県立大学三年（石川県）

## 仙名 雛子

新型コロナウイルスが流行しはじめ、趣味である旅行にも行けず、学業とアルバイトの繰り返しで少し退屈な日々を過ごしていた私は、友人の「おいしいお菓子が食べられるよ」その一言に誘われ、軽い気持ちで茶道部に入部した。

初めてのお稽古で私は、友人のお点前に圧倒された。手品のような帛紗捌き、多様な柄杓の置き方、しゃかしゃかとお茶をたてる心地よい音。なんだろう、この動きは。一つ一つの動作からは、素人の私でも分かるほどに「おもてなしの心」が感じられた。お菓子に誘われ茶道を始めたのだが、一気に私はお点前の魅力に引き込まれた。毎週一回のお稽古であるが、続けていくうちに段々とお点前が身につく、友人のお点前に近づくことが出来た。

私は小さいころから自然が好きであるためか、毎回のお稽古に参加するうちに、先生の茶室に生けられている茶花に興味を持つようになった。茶花は先生が毎回そのときの

季節や行事に合わせて用意してくださり、なかには普段道端などでよく目にするような小さな花も生けられている。

これまでの私は、部屋に飾る花といえば、大きくてはつきりとした色の主張の激しい花をイメージしており、そのほうが部屋は明るく素敵な空間になると思っていた。もちろん、それも間違いではないと思う。しかし、茶道を通してその考え方が大きく変わった。利休の教えの一つには「花は野にあるように」という言葉がある。花それぞれがもつ自然の美しさ、露をかけることで生命が輝く尊さを生かし茶花として生けることで、観る人に命や時の流れについて考えさせ、季節感や自然美を茶室に伝えてくれるのである。なにげなく野に咲く花には、そういったことを観る人に伝える力があるのだと知った。このように茶道はお点前だけでなく茶室になされた小さな工夫からも「おもてなしの心」が感じ取られるのだ。

客への「おもてなしの心」がさまざまな場面で感じ取られる茶道はとても面白い。しかし、今現在、客をもてなそうと思っても客を呼ぶことが出来ない社会となっている。新型コロナウイルスが流行する今、各地で人の密集を避ける動きが進んでいる。当然、小さな茶室で複数人集まって行う茶会も中止が相次いでいる。私はそのような茶会をまだ経験したことがない。人が寄り合い、同じ茶碗で飲み、茶室に飾られた茶花や掛け軸などを観て一喜一憂するので

あろうが、今そのようなことをできないのは残念である。

を喜んでもらえればと思う。

そんな中、お稽古をする中で先生から「独座観念」という考え方を教わった。「独座観念」、それは自分の今の心と向き合うという考えである。こんなコロナ禍であるからこそ人を呼ばなくとも、人にもてなしをできなくとも、自分で自分をもてなすお点前をすることで自分の心と真剣に向き合うことが出来る。先日、この考え方を頭においてお点前をしてみた。私は今年、就活生である。頭の中がこの先の就活の不安でいっぱいであることが自身と向き合うお点前をする中で分かった。お点前にはその心が現れる。その時私は、普段なら間違えないような初歩的な間違いをお点前のなかでしてしまった。茶道は、戦国時代の武将が、その苦しい世を一時の間忘れて楽しむものとして親しまれてきたのだということも先生から教わった。今の世の中に対応する悩み、これからの自分への悩み、人それぞれさまざまな悩みがあると思う。しかし、そのような悩みを一時忘れて、心を落ち着かせ自然を感じ心地よい時間を過ごすことが出来るのが茶道である。そのように心から茶道を楽しむことでお点前にもその心が現れ自分しか出せないお点前の魅力が出てくるのだと思う。これからも茶道を続け、自分しか出せないお点前の魅力を磨いていきたい。そしていつか、コロナ禍がおさまり茶会が出来るようになれば、自分のお点前をたくさんの人に観てもらい、美味しいお茶